

研究課題 文化による死生観・介護観の差異・変容に関する心理福祉学的調査研究  
課題番号 13571007

#### 研究組織

##### 研究代表者

中村 俊哉 福岡教育大学教育学部 教授 (文化臨床心理学)

##### 研究分担者

中村 幸 福岡県立大学人間社会学部 助教授 (社会福祉学)  
倉元 直樹 東北大学高等教育開発推進センター 助教授 (教育心理学)  
中島 義実 福岡教育大学教育学部 助教授 (臨床心理学)

##### 研究協力者

I Kadek Antartika	インドネシア国立ウダヤナ大学 専任講師
佐々木理子	インドネシア国立ウダヤナ大学 学生
Siswoyo	ジャカルタ州立大学 専任講師
Jonnie Rasmada Hutabarat	インドネシア大学、ダルマペルサダ大学 講師
Wayan SUARDITA	インドネシア語 バリ語 通訳
Padmaruchi Mukherjee	インド Visva-bharati 大学 教授
Purabi Gangopadhyay	インド Visva-bharati 大学 教授
古田彦太郎	インド Visva-bharati 大学 教授
ギーターキーニ	インド Visva-bharati 大学 教授
牧野財士	インド Visva-bharati 大学 元教授
Debasish Das	インド Visva-bharati 大学 学生
Bimal Kumar Paul	インド ベンガル語 通訳
胡 金生	中国 遼寧師範大学 専任講師
陳 紹崢	福岡教育大学大学院教育学研究科 大学院生
劉 曉揚	福岡教育大学 教育学部 学生
大羽恵美	チベット自治区 チベット大学 学生
佐々木雅子	中国 雲南師範大学 学生
井村弘子	沖縄大学 人文学部 助教授
桃原一彦	沖縄国際大学 総合文化学部 専任講師
稲福みき子	沖縄国際大学 総合文化学部 教授
市井雅哉	琉球大学 教育学部 助教授
佐藤洋之	東北大学大学院教育情報学教育部 博士後期課程
申 琳琳	福岡教育大学 教育学部 学生
リリス ルンバンドビン	福岡教育大学大学院教育学研究科 大学院生
Daniel Mackey	福岡教育大学 教育学部 学生
Andrew Mcdonald	福岡教育大学 教育学部 学生
Phaidra Kountz	福岡教育大学 教育学部 学生
平井達也	九州産業大学 専任講師

中間報告書に引き続き、インタビュー及び質問紙調査による研究がここにおいて発表できる運びとなった。文化によって死生観が異なり、死への向かい方のプロセス、対人関係や親子関係が異なることが予測されていたが、実際に大きな差異が明らかになった。時代により死生観も変化し、伝統的な死への向き合い方が変化していることが予想されたが、地域により様々な実態が観察された。

## 目的

本研究は、7つの地域（インドネシア（ジャワ地区・バリ島）、インド（ベンガル地区）、中国（南部、北部）、日本（福岡、沖縄））において文化の差による死生観・ターミナルケア観等の違いと、それらの今日的な変容の実態調査を行うことを目的とした。そして、祖先の霊の回帰の意識（いわゆるお盆の現象）、死者や祖先との対話・報告、霊や神についての考え方などの死生観尺度を作成し、3世代同居、共同体意識などや、遺骨の扱い方、墓の持ち方、ターミナル観などの地域による差異を見るときともに、宗教、移動などとの関連を明らかにすることを試みた。高齢社会を迎える中、死生観、死への向き合いのプロセスの多様性を提示し、ある集団の死への向き合い方についての多様なあり方を示すことが目的である。また、死別に伴ううつ状態や、死に向かう心理の理解のための、基本的データを集めることを目的とした。

方法は、主に7つの地域についての文献研究、インタビュー法、そして国際比較のための死生観尺度を盛り込んだ質問紙調査の実施と分析である。改めてインドのデータ収集に多大な協力をいただいたデバシーシさん、バリ島のデータ収集と翻訳に甚大なる貢献をいただいたアンタルティカ先生、2004年10月にジャカルタのデータを収集していただいたジョニー・フタバラート先生、そして2004年11月および12月に遼寧省大連のデータ収集にご尽力いただいた胡金生先生に心より感謝申し上げる。

## 結果の概要

本書の各章に述べた結果のあらましをここで述べる。（ ）は下記の研究報告の番号を示す。

まずアジアと日本の死生観の歴史文献を広く集め、インタビューの一部とともに日本ホスピス・在宅ケア研究会第10回九州大会で発表した（1）。インタビュー法の結果は（2）および（8）にまとめ、統計的比較は（7）で報告した。

本報告書1章（7を掲載）および6章においては、7地域で死生観尺度その他の信頼性を分析し、尺度値を対比した。

6章グラフ2で示したように、死後を決めるものについて、魂自身が決めるというのが日本で高く、神が決めるというのがジャカルタ、バリで高く、魂は消滅するという考えは中国、インドで高かった。1章と6章の表8のとおり、死後は神の許へ行きたいというのが、ジャカルタ、ベンガルで高く、家族や知人のいるところに行きたいは、日本、中国に高かった。

お盆の分布については、インタビューからインドではナブラトレ、モハラヤタルポン、バリ島ではウリヤン、ガルンガンとして存在することがわかった。8章グラフ5のように、日本では宗教にかかわらずお盆尺度が高いが、バリ島ではヒンドゥー教に限って高く、ジャカルタではきわめて低かった。7章のグラフ6に示したように、お盆を行っている群は、変容シャーマニズムが高くなった。同じく、祖先対話を行っている人（グラフ8）、神との対話を行っている人（グラフ9）は変容シャーマニズムが高く、対話がその日常的な形態としてとらえられることがわかった。

8章グラフ8、9に示したように神尺度、因果尺度などはバリ島、ジャカルタ、インドで極めて高かった。8章のグラフ11、12に示すように変容シャーマニズムはジャカルタのキリスト教徒、イスラム教徒でも高いが、委任シャーマニズムはシャーマンを受容している文化でのみ高かった。

死への態度尺度では、8章のグラフ16にみるようにキリスト教の人が一番死を受容し、無宗教の人が最低であることを示した。グラフ18のように、日本では死を自然な側面と見る人が少なかった。近代化による変容と見ることも出来よう。

7章グラフ13、15にみるように、死者、祖先との対話も、神尺度（神との対話）も、用いすぎる人には死別うつ状態が高く出たが、不健康とは必ずしも関連しなかった。11章グラフ4のように地域協力のある人ほどうつ状態を味わえることから、死別時のうつは人間的な側面ともいえる。グラフ8の通り、死者の死への心の準備があると、残された人のうつ状態は軽くなっていた。

さて、10章にみる告知については、日本、中国では希望が高かったが、ジャカルタ、インドでは低かった。死の準備については、文化によって大きな違いが出た。この他、移動に伴う死生観の変化については13章に、シンクレティズムと終末論の文化による違いについては14章に明らかにした。二つの国際学会での発表（5）（6）では、世界各地から大きな反響をうけた。今後、より個人主義的で老人の位置づけが低いアメリカ、その影響を受けつつある東京における死生観、ターミナル観との比較検討が必要である。

## 研究の報告

- 1 中村俊哉 2002 アジアの死生観（火葬、対話、輪廻）ホスピスケアと在宅ケア 25, Vol 10-2, p149
- 2 中村俊哉 2004 南アジアの死生観 インタビュー法から 福岡教育大学紀要 53-4 247-263
- 3 中村俊哉、倉元直樹、中島義実 2004 死生観国際比較のための尺度作成について —日本における祖先対話、輪廻、日常的シャーマニズム— 福岡教育大学紀要 53-4 265-280
- 4 中村俊哉編 2004 文化による死生観・介護観の差異・変容に関する心理福祉学的調査研究 科学研究費補助金 研究成果中間報告書 2004
- 5 NAKAMURA Shunya, KURAMOTO Naoki, NAKASHIMA Yoshimi 2004 Constructing After-Life Scales for international comparison: Dialogue with Ancestors, Reincarnation, Daily Shamanism in Japan and South Asia IACCP 2004 4<sup>th</sup> Aug. 9:50-11:00 Poster A, Xi An p190
- 6 NAKAMURA Shunya, KURAMOTO Naoki, NAKAMURA Koh, NAKASHIMA Yoshimi 2004 The Relation between After-Death Depression and Beliefs on the After-life ICP2004 15:20-17:20 Aug. 10, Beijing, 2081 p452
- 7 中村俊哉、中島義実、倉元直樹、中村幸、イ・カデ・アンタルティカ 2005 死生観と死別体験の国際比較：福岡、沖縄、ベンガル、バリの比較から見えるもの 福岡教育大学紀要 54-4 223-240
- 8 中村俊哉 インドネシアの死生観：バリ、ジャカルタ、ジョグジャカルタにおけるインタビューから 福岡教育大学紀要 54-4 199-221
- 9 中村俊哉、中島義実、中村幸 2005 死生観の国際比較：福岡、沖縄、インド、インドネシアでの調査から 第12回多文化間精神医学会 アクロス福岡

## 予算（直接経費）

平成13年度	3,700千円
平成14年度	3,200千円
平成15年度	2,400千円
平成16年度	1,700千円
合計	11,000千円

## 目次

1	死生観と死別体験の国際比較 福岡、沖縄、ベンガル、バリの比較から見えるもの	5-22
2	インドネシアの死生観：バリ、ジャカルタ、ジョグジャカルタにおけるインタビューから	23-45
3	学会発表 抄録 アジアの死生観（火葬、対話、輪廻）	47-50
4	学会発表 抄録 Constructing After-Life Scales for international comparison: Dialogue with Ancestors, Reincarnation, Daily Shamanism in Japan and South Asia	51-52
5	学会発表 抄録 The Relation between After-Death Depression and Beliefs on the After-Life	53-56
6	中村 死生観と死別体験の国際比較2 ジャカルタデータと中国データ	57-68
7	中村 空想対話と日常的シャーマニズム 臨床との関係から	69-77
8	中村 宗教別死生観	78-85
9	中村 死をめぐる考え方と共同体	86-88
10	中村 ターミナルと告知	89-90
11	中村 死別うつ状態	91-94
12	中村幸 ターミナルケア	95-98
13	倉元、中村 移動と死生観	99-103
14	中島、中村 宗教間寛容態度および終末観についての地域間および宗教間における比較検討	104-111
15	中島 刺激語としての宗教-宗教学の立場から予想される疑問に関する補遺	112-115
16	中村 時代の変化と死生観の変容	116
17	インタビュー逐語録 インド、インドネシア（ジャカルタ、バリ島）	117-128